

あなたが好き

唯川恵

あなたが欲しい

唯川恵

唯川 恵 (ゆいかわ・けい)

1955年金沢市生まれ。OL生活を10年送った後、作家活動に入る。

共感とエールに満ちた小説・エッセイ群は、若い女性たちの圧倒的支持を得ている。

近著に『きっとあなたにできること』(PHP研究所)

『幸せを見つけたくて』(海竜社)

『彼方への日々』(集英社)

『泣かないで パーティはこれから』(大和書房)

あなたが欲しい

1995年5月5日 第一刷発行

著 者——唯川 恵

発行者——大和謙二

発行所——大和書房

東京都文京区関口1-33-4

電話03(3203)4511

振替00160-9-64227

印刷所——厚德社

製本所——小泉製本

©1995 Kei Yuikawa Printed in Japan

ISBN4-479-65005-9

乱丁本・落丁本はお取替します

1	赤いハイヒールの裸婦	5
---	------------	---

2	尖った石のように	47
---	----------	----

3	まるで罪に似て甘く	101
---	-----------	-----

4	阿修羅のごとく	143
---	---------	-----

5	まだ間に合うかもしれない	169
---	--------------	-----

	あとがき	204
--	------	-----

装帧——坂川栄治

あなたが欲しい

1 赤いハイヒールの裸婦

理沙子^{りさこ}が、その彼を初めて見たのは、六本木の交差点近くにある喫茶店だった。夕方に降った五月の雨が、排気ガスに汚れたビルや道路を洗い流し、夜行動物たちの棲み処^{すみどころ}であるこの街も、いくらか健康的で夢のある場所に見せていた。

「同僚の氷川幹也^{ひかわみきや}だよ」

と、恋人の亮^{りょう}から紹介された時、理沙子はふっと心が揺れるのを感じた。

面差しがどことなく、五年前に死んだ兄に似ていた。

聡明な印象をあたえる額。男にしては少し細い顎^{あご}の線。それに反して意志の強そうな唇。何より、まっすぐに相手を見つめるその眼差し。

「今日は招待されてもないのに、どうも。氷川です」

彼は遠慮がちに言うのと、軽く頭を下げた。

今夜は、理沙子の高校時代からの友人である久我原桐^{くがはらきり}が初めて個展を開くことになり、その前

夜祭を祝うパーティに出席することになっていた。

「俺が誘ったんだ。金曜の夜だというのにこいつときたら、まっすぐアパートに帰るって言うからさ。いい年をした男が、それじゃ身体に悪いだろう」

とは言ったものの、亮の考えはわかっている。亮はひとりで来るのが気が重かったに違いない。ふたりを引き合わせた時から、亮は桐の遠慮ない物言いにあまりいい印象は持っていなかった。

けれど、理沙子は桐に亮を気に入ってもらいたかったし、亮に対してもそうだった。だから無理を言ったのだ。

「大勢の人に来てもらった方が彼女も喜ぶわ。私、^{さかき}榊理沙子です。よろしく」

理沙子は笑顔で答えた。

「今夜は結構女の子も来るんだろ」

オーダーしたコーヒーを口に運びながら亮が言う。

「ええ、たぶんね。それに私も呼んだから」

「そっか。ようし氷川、うまくひとりやふたり、ナンバしていけよ」

亮はからかい気味に幹也を肘でつついた。

屈託のない亮はいつもこんな調子だった。

けれど、育ちの良さからか嫌味はない。料理で言うなら素材の良さで、どんなに荒っぽい調理法でも、最後のところで品を失うことはないのだ。

亮のそんなところが、理沙子は気に入っていた。

亮と付き合い始めてそろそろ半年がたとうとしている。

知り合ったのは、父の代理で仕方なく出掛けた政治家の資金集めパーティだった。亮もまた、父親の代わりに出席していた。退屈な、義理だけが詰まったパーティだった。

そんな中で、目が合い、距離が縮まり、言葉を交わし、連絡先を教え合い、それからひと月後にはふたりは恋人になった。

亮は理沙子と二歳違いの二十七歳。M商社に勤務している。家柄もよく出身大学も一流だった。けれど、そんなことで惹かれたのでは、決して、ない。

理沙子は亮といくと、遊園地のメリーゴーランドやティカップに乗っているような気持ちになった。つまり、景色がいつも変わるのだ。くるりと一回転してみると、亮はもうさっきまでの亮ではない。いつも新しい亮がそこにいて、理沙子を退屈させないのだ。亮は陽気でお洒落で会話が上手く、それに何より、ベッドで女を喜ばせることが好きと来ていた。

まだ結婚は意識しているわけではない。けれど二十五歳になった今、亮との将来は想像の域から出て、いくらか現実を帯び始めているのは確かだった。

「あなたのことは、有沢から時々聞かされてますよ」

幹也が言い、理沙子は顔を上げた。

「あら、どんなふうに？」

すかさず亮が口を挟んだ。

「もちろん、美人で気立てがよくて俺には過ぎた恋人だってさ。な、氷川そうだろう」

「ああ」

幹也が頷く。

「本当かしら」

「本当に決まってるだろ」

理沙子は幹也に尋ねた。

「それで、実際に私を見て、どうお思いになった？」

幹也はしばらく理沙子を見つめた。

「そうだな、有沢の言葉は嘘だっと思って思いましたよ」

「え……」

「有沢が言ってる以上だったから」

理沙子は思わず口元をほころばせた。

齒が浮くようなお世辞にはうんざりだが、こんなスパイスが効いた言葉は心地いい。

亮が意外な顔つきで、幹也を振り返った。

「へえ、氷川、おまえ意外と決めるじゃないか」

幹也はコーヒーを口に運びながら、兄に似たその口元から白い齒をこぼした。

そこで十五分ほど話し、今夜のパーティ会場となるギャラリーに向かった。

理沙子の腕の中には、桐が好きなロココという名を持つチューリップの花束がある。

チューリップと言っても、とても特殊な姿をしていて、油絵の具を混ぜたような色合いが個性的な美しさを表わしている。この花を手に入れるため、理沙子は一週間も前から、知り合いの花屋に頼んで取り寄せてもらったのだ。何かとセンスにうるさい桐も、これならきつと満足してくれるだろう。

高名な日本画家を父に持つ桐は、美術の道を拒みながら、結局は彼女自身を持つ溢れた才能に負けて同じ道に進んだ。日本画ではなく、油彩を選んだのは、彼女なりのささやかな抵抗だったのだろう。

桐は、物を作り上げてゆくことに携^{たずさ}わる者が持つ、少し皮肉過ぎる目と、神経質過ぎるこだわ^りを持っていた。

夕暮れの混み始めた人波に逆らうように、三人は防衛庁の正門を往きすぎた。

六階建ての瀟^{しょうしや}洒な造りのビル。その一階がギャラリーになっている。

通りには、生花が飾られていた。足の長い花器に、洋蘭とカーネーションとかすみ草が差し込まれ、プラスチック板に大きく『祝久我原桐様』と赤い字で書かれてあった。

理沙子は思わず苦笑した。この俗っぽい花を、桐はどんな気持ちで受け取ったのだろう。

ギャラリーに入ると、すぐに桐が近づいて来た。

桐は、黒いシルクのパンツスーツを着ている。胸元に下げた石は、彼女の誕生石でもあるアメジストだ。同じピアスをしている。

髪はベリーショートで、化粧気もあまりなく、細身の桐は女性と言うよりは少女、少女と言うよりは少年のように見えた。

「よく来てくれたわ、待ってたのよ」

桐は初めての個展で、少し高揚しているらしく、頬がうっすらと上気していた。

「おめでとう」

理沙子は手にしていた花束を差し出した。

受け取ると、桐はぎゅっと胸に抱き締め、顔を埋めた。

「ありがとう、このチューリップ、よく手に入ったわね」

「気を遣ったのよ。下手な花を持って来たんじゃ、桐に叱られるでしょ」

「見た？ 前の花」

「もちろん」

「あれじゃバチンコ屋の開店と同じね。捨ててしまいたいんだけど、ここのオーナーからだからそうもいなくて」

それから桐は、理沙子の背後に並ぶふたりの男たちに目を向け、亮に声をかけた。

「亮さん久しぶり、理沙子のバースデーパーティ以来ね」

「ああ、どうも」

亮が無愛想に答える。けれど、桐はまったく意に介していない。

「そして、こちらは亮のお友達で氷川さん」

理沙子が紹介した。

「初めまして」

幹也が頭を下げる。

「ようこそ」

桐は一瞬ふっと表情を止め、それからほほ笑みを浮かべた。

「ゆっくり見て行つて。気に入ったのがあれば売却済みのリボンをつけておくわ」

「そんなこと言つて、高いんでしょう」

「特別サービスしちゃうから。じゃあ私、悪いけどまだ挨拶しなきゃいけない人がいるから行くわ」

「ええ。私たちのことは気にしないで。適当にやってるから」

中央のテーブルには、理沙子も雑誌などで顔を知っている画家や美術評論家たちがいる。その中に桐は戻って行つた。

父親に対する反発が、油彩という道を選ばせただったが、美術というひとつの世界の中では、やはり父親の存在を拒みきれものではないのだろう。現に、桐の作品はどこかで父親の影

響を受けていたし、その影響は桐の感性を確実に磨き上げていた。

三人はギャラリーを一周した。六号ほどの大きさから、百号近くの大作もある。

モチーフは女性が多く、裸婦も何点かあった。色彩は鮮やかで、赤と紫がよく使われている。赤と紫は、桐が昔から好んでいる色だ。

「こういうの、誰が買うんだ」

亮が、五十号ばかりの赤いハイヒールを履いた裸婦の前に立ち、腕を組んだ。

森の中で羽根を休めた白い鳥のような裸婦は、笑っているようにも、泣いているようにも見えた。安らぎと激しさが同居しているようでもあった。その無防備なポーズから、ヘアが露わに描かれている。

理沙子は返事に困って、キャンバスを眺めた。

「男が買うのか。けど、部屋には飾れないだろうな、彼女が来たらこの前で絶句するよ。女は買わないよな。同性の裸を見たって面白くもないだろうし。枯れたオヤジが買うのかな。まあ、ちょっとセンスのいいラブホテルには、時々こういうのが置いてあるけど」

「亮！」

理沙子は亮をたしなめるように睨みつけた。桐の耳にでも入ったら大事だ。亮が首をすくめる。

「素朴な感想だよ。俺は芸術に対して茶化すことしかできない凡人だからさ」

亮はすぐに次の作品に移って行った。

「君に似てるな」

不意に背後から言われた。

「え……？」

理沙子は振り返った。

「モデルは君じゃないのかな」

幹也が言う。

「まさか。私、モデルになったことなんて一度もないわ」

「モデルが目の前にいなくちゃ描けないってものでもないだろう」

「それはそうかもしれないけど」

理沙子はもう一度作品を見た。

身体の線はもとより、髪 of 長さも違う。理沙子は肩までのストレートヘア、女は背中をすっぽり覆う巻き毛だ。顔だって女の顎の張った派手な顔つきとはまったく違う。

「やっぱり違うわ、私じゃないわ。どこも似てるところなんてないもの」

「姿形じゃないところで」

「だったらなおさらだわ。私はこの女性が発してるような色っぽさも、激しさも持ち合わせてないもの」

「そうかな、自分で気づいてないだけなんじゃないか」

理沙子は再び幹也を振り返った。

「いや失礼、ちょっと言い過ぎだったかな」

「氷川さんは、人間分析が好きなの？」

「相手によるよ」

初めて会ったにしては、確かに無遠慮過ぎる言葉と思われた。

それでも不快と感じないのは、やはり兄に似ているからかもしれないと思う。

理沙子は兄が好きだった。欲という感情を忘れたような兄だった。人間より、動物や草や木を愛した。少し変わり者だと言われていたが、兄の言うことなら、肌にオイルを塗るように、理沙子の心の中に素早く浸透した。

それと同じように、幹也の言葉はまっすぐに理沙子の胸に届いた。

「本当に、私にこの女性と同じようなところがあるのかしら」

「たぶん」

「信じられないわ」

「人は、いつも自分に裏切られるものさ。いい意味でも、悪い意味でも」

その時、奥から亮の呼ぶ声がした。

「何やってるんだよ、こっちこっち」

亮はもう水割りのグラスを手をしている。理沙子は幹也との話を切り上げて、亮に近づいた。